《クィンティア・ウォー》ー暴れ姫の序曲ー

沖野 純夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《クインティア・ウォー》―暴れ姫の序曲―

【Nコード】

N8802C

【作者名】

沖野 純夏

【あらすじ】

平和、自然、そして『王』。その象徴を失ったとき、世界一の大国と呼ばれた『クインティア』の混沌が始まった。事故に巻き込まれ記憶を失った少女リナは、彼女を救った恩人の求めにより、二人の少年を供にして『次代』を探す旅にでる。ふと立ち寄った秩序のない町で、不思議な剣の噂を聞いた三人はやがて、その町に隠された不可思議な謎に気付く。

1. プロローグ

風吹きすさぶ荒野の中、少年がひとりたっている。酷く吹き付けてくる砂まじりの荒れ狂った風が、無防備な少年の体に当たり、時折小さな石礫が柔らかな皮膚を傷つけていた。その痛みを顔にしかめるでもなく、表情は虚ろなまま、草も生えぬ無毛の大地を見下ろしている。

ふいに、風が止んだ。少年は顔を上げ、辺りを見回した。西方から青毛の大きな馬に乗った人の影。それを見定めると、傍らの地面に突き刺さった少年の背丈ほどもある長剣に手を伸ばす。ずしりと重いはずであるうそれを、軽々と片手で引き抜き、下段に構えた。

やがて、現れた馬上の人物は少年の前で止まり、馬より下りた。無言で少年の前にたち、彼を見下ろす。構えられた剣先がぴくりと動いた。その瞬間――

振り上げた刃は、確実に相手の心臓に突き刺さった。持てる力のままに突き入れ、引き抜く。どさり、と倒れる体。音もなく流れ出す鮮血が乾いた大地を赤く染めていった。その様子を見る少年の表情には、敵を打ち倒した興奮も喜びも何の感情も浮かんではいなかった。ただ、先程と同じように虚ろな顔で足元に転がった骸を眺めている。

ぼつり、と立ち尽くす少年の頬に雨粒があたった。いつの間にか照りつける太陽を覆い隠した雲が雨を振らせはじめたのだ。掌をまるで雨を受け止めるかのように差し上げる。その上に激しく振り出した雨が落ちてきた。が、やがてその手は力なく下ろされる。

「約束は果たされた。俺は、どうしたら……」

震える声で呟く少年の声を、強い雨音が掻き消していく。

そしてその場所には、物言わぬ骸とその命を奪った長剣だけが残った。

2・元気娘は逃亡中？

「なんでこんなことになるのよ!!」

一人の少女が、市が立ち並んだ賑やかな街道を全力疾走していた。

その後方からは物騒な刃物や棍棒を手にした男が数人、罵声をあげながら猛然と追いかけてきている。

男達は額に一樣に汗をかき、その様子を啞然として見守っている人々を突き飛ばし、脇目もふらずに躍起になっている。

にもかかわらず追い付けないのは、少女が意外に軽い身のこなしで、道行く人々を交わしながら走っていくからだろう。後ろを振り返ることなく、複雑に入り組んだ道をわざわざ選んで逃げていく。

だが、土地勘のない場所での追いかけてこでは彼女に勝ち目はなかった。

行き止まりを示す赤い土壁が少女の行く手を阻む。少女は辺りを見回し、逃げ道を探すが、突破できそうにない。

彼女は壁を背に立ち止まると、やって来る男達を、琥珀色の瞳で睨みつけた。かぶったフードを跳ね上げ、長衣を脱ぎ捨てる。豊かに波打つ茶褐色の長い髪が砂混じりの風にあおられ、ふわりと揺れる。

少女らしいほっそりとした体つきに、構えた剣はかなりアンバランスに見える。男達の間から失笑がもれた。

「お嬢ちゃん、たいそうご立派なもん持つてるが、振り回せるのかね」

「やめときな。そんな細腕で無茶をすると、怪我するぞ」

男達は口々にはやし立てる。1人の男が他の者を押し退けるように少女の前に進み出た。その顔には卑しい笑みが浮かんでいる。じろりと上から下まで一瞥すると、その笑みは更に大きくなった。

「いろいろと楽しめそうだな。だから無駄な事をして、そのキレイな身体に傷をつけてもらっちゃ困る」

男の勝手な言い分にも、少女はまったく怯える様子もなく、鼻先でふんと笑った。

「下品なことほざいてんじゃないわよ。RPGなら5秒で倒されるゴロツキのくせに」

一見淑やかそうに見える少女の口から発せられた暴言に、男達は一瞬啞然とした。

普段であれば女は震え上がり、泣き伏すはずの場面展開である。しかし少女は瞳に冷笑を浮かべ、あまつさえ挑発まで口にしてのけた。

自分達の絶対的有利を確信していた暴漢達は、憤った。

口々に野粗な言葉を吐き散らし、もっている得物を向ける。

「さっすが、脳筋族。ボキャブラリーの貧相さは人後におちないわね。それ以外に自慢するところ、ないわけ？」

さらなる挑発の言葉に、大の男達が少女に飛びかかって行く。

数十秒後には彼女の運命は怒り狂った彼等の手に墮ちるはずだった。

その瞬間。

少女の腕を捕らえようとした男の腕が、横合いから出された手によって押さえられる。ゴキリ、と嫌な音がして、腕はあらぬ方向に曲がった。

「何やってるんだ、馬鹿娘。宿屋で待つてろって言っただろっが」

行き止まりのはずの赤土の壁を叩き壊して登場した少年が、男を掴んだ手を思い切り振り払う。

叫び声を上げてうずくまった男を尻目に、なぜか怒り顔の少女を自分のもとへ引き寄せる。

「拳げ句の果てに、挑発して事態を悪化させやがって。自分を過信するなっつていつも言ってるだろっ」

何を聞いてるんだ、と説教しながら、状況の掴めていない男達に冷たい視線を向ける。冬の海を思わせる碧色の双眸が、怒り沸き立つ彼等を射抜いた。

「おい、悪人面のおっさん達よ。この脳足りん娘に怒るのはわかるがー」

誰の脳が足りないのよ、との抗議はまったく無視してのける。

「年端もいかない小娘に剣を向けるとは、どういうことだ」

その質問に答える者はなく、意味不明の唸り声を発しながら、少年の方へ走り込んでくる。

「大人しくしてくれてくれたほうが、お宅等の身のためなんだけどな」

少年がどちらが悪役か分からない台詞を吐き、肩を竦めたとき、1人の男が悲鳴をあげた。少年の体に剣を突き刺そうとした男の右足から鮮血がほとばしる。付け根から先がごろんと地面に転がった。片足を失った男はその場に倒れふした。

その背後には、これまた一人の少年が長剣を手にして立っていた。

その彼の身の丈ほどもある剣先からは血が滴っていたが、どうしたのか彼のまとうローブには一滴のしみさえ付いていなかった。

「リナ、何も言わないでいなくなっちゃいけないよ」

穏やかな声で、少女に話しかける。

「僕達には土地勘がないから探し出すのも一苦労だ。なにより、君が危ない目に遭っていてもすぐ駆けつけてあげられない。心配でどうにか頑張ってしまっよ」

拗ねた表情を浮かべる少女に一步近づいて、その顔を覗き込む。

優しい深緑の瞳が彼女の視線をとらえた。彼がふわりと微笑むと、少女はおずおずと顔を上げその顔を見つめ返し、そして満面の笑みを浮かべた。

殺伐とした風景の中で繰り広げられている、ほのぼのとした雰囲気だ。よう光景に、男達はあつけにとられた様で、皆一様にぼかんと口を開けている。

「いつまでもラブシーンやってんじゃねえよ、この主従は!!」

もう一人の少年が苛立った声で、2人を引き離す。再び口を尖らせた少女を、鋭い目で睨み付けた。

「勝手にうるうるするなって、何回言えばわかるんだ、お前は。慌てて探し出してみりゃ、大量のオヤジ共に捕まりそうになってるし。行く先々で問題ばかり起こしてたら、あの人の所に連れて帰るぜ」

「…ごめんなさい」

少年の言葉に、少女は俯いて小さな声で詫びた。騒ぎが大きくなりすぎたことを素直に反省したらしい。

「そこまでしたらどうだい、ラエル。大体、これまでのトラブルの原因は君にもあるんだから、リナばかり責められないよ」

厳しさを潜ませた声に、ラエルと呼ばれた少年は小さく舌打ちした。

「分かったよ。本当にリナに甘いんだからな、アキは」

これ以上指摘されるのはごめんとばかりに早々に説教を諦めて、

撤退を始めようとそろそろと動き出していた男達に鋭い視線を放つ。

「逃げるんじゃないよ、てめえ等」

殺気のコもった一言に男達はギクリと足を止める。

「そうそう、事情は説明してもらわないとね。もし僕等の姫が迷惑をかけたなら、きちんとお詫びしなくてはいけないし」

いつの間にか、男達の退路を絶つように路地の入り口側へと場所を移していた少年が、再び長剣をさりげなく手にする。その口にはかれた笑みは、どこか薄ら寒いものを感じさせた。

大人しくなった男達の様子に一つ頷いて、説明を促すように少女を見る。

「別にあたしが何かしたって訳じゃないのよ。ただ、ぶつかっただけで…」

「で、難癖を付けられたわけか」

典型的な破落戸だなと、呆れたような口調で呟くラエル。

「ぶつかって、彼等の持つてる袋の中身が路地に落ちたのよ、全部」

「って、しっかり原因つくってるじゃねえか！」

「ちゃんと拾おうとしたわよ！だけど断られた上に脅されて、腹が立って」

「言い返したのか」

「触ろうとしたから泣きどころを蹴ったの」

「… やっぱりな」

それはもう見事に跳躍を決めたのだろう。その様子がまざまざと想像出来て、ラエルは大きく嘆息して、額をおさえた。

「初対面の乙女に触れようってというのが、そもそも間違いなのよ！」

「間違ってるのはお前だ！そう言うときはちゃんと呼べていつも言ってるだろうが！！」

本当に世話がやける、と彼の溜め息は更に大きくなる。苦労性な少年に男達からは何故か同情の視線が投げられる。ラエルはもう頭を抱えるしかなかった。

「でも、おかしいのよ、この人達」

「どうして？」

疲れきった表情を浮かべてうなだれているラエルに変わり、今度は何事にも動じないらしいアキが聞いている。

「落ちたのは色のくすんだ銀だったんだけど、拾おうとしたら凄い剣幕で突き飛ばそうとしてきたわ」

盗るつもりなんてないのにね、とあくまで呑気な少女の言葉に、少年等の目がギラリと光った。その迫力に大の男達が竦みあがる。

「色のくすんだ『銀』ねえ…」

「こんなところでビンゴなんて、さすがトラブル体質リナ」

「失礼ね！」

「褒めてるんだ、素直に喜べ」

さつきとは打って変わってにこやかにリナの頭を撫でる。彼女はそれを振り払い、ラエルにむかって思い切り舌を出した。

「さてと、オジサン達。うちの姫が失礼したなあ。ちゃんと弁償させてもらうから、中身が傷ついてないか、ちゃんと確認させてもらっていいか」

口調こそざつくばらんに話しかけてはいるが、そのうちには緊迫したものが込められている。

全員の視線が自然に中央にいる男の持つ革袋へと流れた。その男はそれをギョツと握り締めた。

「まあ、無理ならそれなりの手段ってやつもあるしな…」

もはやどちらが悪人なのか判断しかねる台詞を吐きつつ、じりじりと中央の男の元へ歩いていくラエル。アキは隙のない構えをとっている。いつでも斬りかかれる態勢だ。

そのとき、沢山の靴音と共に鋭い警笛が当たり響きわたった。

「本当に今日はツイてないよな。なんでここで邪魔が入るんだ？」

「月並みにいえば、誰かさんの日頃の行いが良くないんだろうな」

「どう考えてもリナだろう」

「なんであたしよ!」

下らない言い合いをしている間に、回りを囲まれた彼等は囲んだ人数を確認した。

「これぐらいならどうにかなるか。オレが8でアキが6だな」

「配分を間違えてないかい、ラエル」

「実力で判断した順当な数だと思っただがな」

「あたしの分は？」

むくれたように言うリナの頭をポンと叩いて、ラエルは微笑んだ。

「今回は大人しく見ている。もし自分のところに来たら片付けていい」

と、言いおいて先程は手にしなかった剣をすらりと抜きはなつ。これまた年端のいかぬ少年が持つには大層な豪剣である。それをまるで木の棒きれを扱うように軽々と一旋させ、勢いよく切りかかってくる男の胸に叩き込んだ。

派手な鮮血が飛び散るかと思われたが、相手は血の一滴すら流さず、腹を押さえたまま、その場に崩れ落ちる。

それに見向きもせず、バランスを崩すことを期待して襲ってきた刃を剣先ではらい、そのまま突進して一太刀浴びせる。

「本当に絶好調だね」

好戦的なラエルの戦いぶりを評しながら、こちらは構えた剣を小さく動かして、勢いよく飛んでくる切っ先を反らし、退こうとした相手の急所を突く。

1人が隙をついて、手持ち無沙汰に様子を眺めている少女に駆け寄った。彼女は必死の形相で向かってくる男を見て、にこり、と微笑む。

最初の一撃をかわし、飛び上がって相手の手を蹴り上げ、取り落とした得物を足でふんずけたあげくに、持っていた剣で相手の脇腹を打つ。

やはり何故か血は吹き出ず、男は横に倒れた。

「やっぱり足癖悪いな、お前は」

「見事だ」

双方から別々の感想が寄越される頃には、地面にはうめき声を上げて転がる男達ばかりだった。

「あつ、肝心のオヤジ共を逃がしたっ！！」

見れば、先程まで恐怖に身を震わせていた破落戸達はいない。こ

の争いのすきに逃げ出したらしい。

「くそつ、こいつ等のせいだ。手加減なんかしてやるんじゃないか
た」

「それが狙いだっただのかもね」

地団太をふんで悔しがるラエルを白い目で見つっ、リナがぼそりと呟いた。

「… ちよつと来て、二人とも」

意識のない男のひとりの傍でなにやら探っていたアキが、にらみ合いをはじめていた二人を呼んだ。行ってみると、彼は男の鎧の胸元に刻まれている模様を指差した。

それは一本の剣と旗が交差して地面に突き刺さっているという、いっふう変わったモチーフのものだ。

「少なくとも俺の知ってる地方都市や貴族の中には、この紋章はないな」

ラエルが首を傾げながら言う。リナはその隣ではたと手を打った。

「確かこれ、クーリエが見せてくれた資料の中にあっただわ」

二人の少年が一齐に少女を凝視する。その目に構うことなく、彼女はひっかかっている記憶の断片を手繰り寄せた。

「分かった。『ヤシユネル』の商旗だ」

二人の口がぽかりと開く。リナはすっきりした顔で二人を振り返った。

「国境近くにあるローディ地方の豪族の紋章だつて聞いたよ。…けど、なんでこんな中央地方にこの鎧つけた人がいるんだろ？」

問いかけるように二人を見るがまったく反応しない。

しばらくして、ようやく衝撃から立ち直つたらしい二人は睨みあげてくるリナに苦笑して、なんとはなしに顔を見合わせた。

「確実に俺達、あの人に手のひらの上で踊らされてる、よな」

「まったく、僕等にどれだけの茨の道を歩かせたいんだろうね…」

深い吐息と共に吐き出された言葉は、少年には似つかわしくない哀愁をたたえていた。

3・この策謀は誰のため？【前編】

事の起こりは今から約二日前、クーリエ・クエル・デルフィンの邸宅からだった。

大陸最大を誇る王国のクインティア。その中でも最も栄える、王都トールイズにほど近い、カシユヤの森の奥深くに、『暁の御方』と呼称されるクーリエの自宅はある。

俗にクーリエ老と呼ばれるこの館の主は、『老』と呼ばれ傲わされるには違和感のある若々しさと快活さをもつ、20代後半の若者である。外見上は。先王に仕え、軍をまとめる臣下としては最高位にいた彼は、敬愛する王が身罷ると、事後処理もそこにこの森の中へと隠遁した。

「宮廷人というものは、腐敗した肉塊でしかない」

それが彼の常々口癖だが、自分がその中の一員であったことは忘れてしまいたい不快なことであるらしい。権力の中で右往左往していた事は自分の唯一の汚点だ、と本気で信じている。

そんな世捨て人の静かな住処に、多大な騒々しさと春日のような明るさをもった少女リナが飛び込んできて、もう十月がたつ。

最初は環境の激変に戸惑っていた少女も、現在では元気に庭先や周辺の森などを飛び跳ねまわっている。館で働く者達も本来の主そ

うちのけで、世話をやいている有り様だ。

「最近、私の存在が薄まったように感じるのは気のせいだろうか…」

中庭で少年2人を相手に模擬剣で勝負を挑んでいる、小柄な少女の様子を眺めながら、クーリエは黒耀石にも称えられる瞳を寂しげに曇らせた。口からは長々と溜め息を吐く。その主の側でお茶の用意をしていた女性が無表情で彼をみた。

「リナ様やラエル様、アキ様はとても生活が『規則正しく』しかも『快活』でいらっしやいます。ですから、皆『お世話のしがいがある』と張り切っております」

「なんだか含みのある口調だなあ。まあ、私的にも見えて『目の保養』になるから、いいけどね」

「非常に『変態的』な発言です、主様」

「… やっぱり蔑ろにされているんだな、私は」

「気のせいでしょう」

彼女の淡々と告げる言葉に毒気はない。しかし、密かなダメージを受けたクーリエは美しく整った顔をしかめ、彼女に退出するよう、促した。

再び庭先に目を転じると、体中に葉っぱをつけ、それでも果敢にラエルに挑みかかっていくリナの姿が見えた。彼女のそばではアキ

が盛んに口を出している。

「本当に、仲のいいことだ」

呟いて、用意されたお茶を一口含む。上品な薫りが口の中に広がり、思わず顔が綻んだ。

椅子に腰を落ち着け、先程舞い込んだ手紙を読む。一転した氷のような無表情が、その内容の厳しさを表していた。

一読すると、別の手紙を取り上げ、そちらにも目を通す。自分から遠く離れたはずの世界の醜悪さが、その文面からも読み取れ、彼は軽く目を瞑った。

自らを追い詰め、人を謀り生きていたあの頃の事が、まざまざと思いおこされる。

打ち捨て、けして再び足を踏み入れる気の無かった場所。でも、そんな贅沢は赦されないようだ。

「のんびりと余生を過ごすのはまだ先の事か…」

願わくば遠く先の未来でないように、と軽く祈りを捧げると、やがて来るはずの客人を迎えるため、書斎を後にした。

「今さっき、書斎の方から凝視してたぜ」

打ち合い終わって、疲れた体を芝生の上に横たわらせていたりナは、ラエルの言葉で上体を起こし、書斎のある方向をみた。しかし、そこには誰の姿もない。

「ラエルの気のせいじゃないの？」

小さく首をかしげて否定するリナをラエルは鼻で笑った。

「ばーか、誰が間違えるかよ。あんな『変質者的』な視線、あの人以上あり得えねえ」

「だね。なかなか粘着質な視線だったよ」

横で聞いていたアキも力強く同意する。散々な少年2人の評価にリナの頬がひきつった。

「今日のお目覚めは、けっこう早かったみたいだな。まだ昼食の時刻になってないぜ」

水差しの水をコップに注いでリナに渡しながら、笑いを含んだ声でラエルが言うと、彼女は渋々と頷いた。

「お客様が来られるそうよ。ティナが、朝言ってたわ」

「客ねえ、この時期に？」

「興味深いけど、下手に関わろうとしたら、また面倒」ことを押し付けられるよ、ラエル。探るなら、慎重に」

「わかってらい」

リナはときたま、この2人の会話についていけなくなる。主にクーリエ絡みがそれで、どうやらリナを関わらせるつもりは全くないらしい。小さな疎外感、ここ数ヶ月、あまり感じることもなかった寂しさが、心の中で大きくなる。

思わず俯いて、何かを堪えるように下唇を少し咬む。彼女の昔からの癖だ。咬みすぎて、血を出したこともある。この癖がでたのは久しぶりだな、とリナは自嘲した。

「こら、そんなにコップを握りしめたら、割れるだろうが」

軽く頭を叩かれ、顔を上げると、呆れたようなラエルの顔が真正面にあった。

「はい、それはこっちにね」

と、声がして視線を横に移すと、アキがにこりと笑って彼女の手からコップを取り上げた。

2人の息のあつた連携プレイに、リナの表情が柔らかくなった。

多少、意思疎通ができなくても、この少年達は自分を大事にしてくれる大切な親友だ。2人の考えが読めるまでに、自分が成長すればいい。

「ありがとう」

そう言って、2人に微笑みかけると、再び側に置いてあった模擬剣をとる。

「今度はアキが相手になってよね。いつも口先で逃げようとするんだから」

勢いよく立ち上がって、剣先をビシッとアキに向ける。諦めたような微笑みを浮かべて頷く彼に満面の笑みを見せて、休憩していた木立の中から飛び出していく。

結いきれない茶褐色の髪がゆらりと揺れ、日の光に照らされたそれが、まるで光の帯のように輝いてみえた。

「… ああして見てると、可愛いんだけどな」

「惚れた？」

「いや、無理」

ラエルの真顔での即答に、アキはくすりと笑った。

「そうだね。そういう対象にする子じゃない」

2人の少年は無意識に自身の腰に履かれた剣の柄を握った。見事な彫刻が施されたその中心には、よく磨かれた石がはめ込まれている。

ラエルには濃い青、アキには新緑の色。まるでどちらもの瞳の色を映したかのような輝きが、そこにはあった。

互いの行動が期せずして同じものであったことに、2人は苦笑した。

さっきのリナへの態度も示し合わせてやったことではない。ただ、この幾月かの間に2人のとる立場や位置というものがはっきりしてきた結果でもあった。

自分達が守ると決めたことと、護るべき者はただひとつー。

「当座は、陰謀大好き変態若作り爺のはかりごとから遠ざけるのが先決だな」

「一つもはずれてはいないけど、長いよ。せめて変態爺程度にしよ
う」

「あの人の名前を呼ぶたびに、それを心の中で呟いてるぜ、俺は。いつか口に出しちまいそうだ」

アキは同意とばかりに頷くと、陽向で素振りをしているリナに目を移した。

「それも重要だけど、まずは、うちのお姫様の欲求を満たさないとね。今にも怒鳴りだしそうだ」

「呼ばれてるのは、お前だ。俺は昼寝でもしてる」

「まだ日は昇りきっていない。昼寝にはまだ早いよ、ラエル」

「じゃあ、朝寝だ。とにかく俺は寝る」

「早朝の散歩は、朝寝坊な君には厳しかったかな？」

「ごろりと芝生に横になるラエルに、アキは微笑みながら聞いた。

「やっぱりイヤミな野郎だな、お前は。ああ、そのとおりだとも。だから寝させる」

しかめつらで言い返すと、目を瞑り、横を向く。会話終了の合図に、アキはますます笑みを深めると、しびれをきらしかけている少女の元に、早足で向かっていった。

昼食を終えたラエルは、来客と懇談中のクーリエを探して、館の中をさ迷い歩いていた。

それというのも、いつも使われている応接間にはひとつこひとりいなかったからだ。

（私室のスペースで会ってたら、盗み聴きは無理だな）

クーリエの私室がある一角には、どうやら特殊な『結界』が張り巡らせてあるようだ。

しかも、見事なトラップ仕掛けである。

（こないだは、いつの間にか中庭にある池にはまり込んだし）

慎重に邸内を探りながら、目的の姿を見つけ出そうと躍起になっていると、不意に背後で人の立つ気配がした。

「注意力が散漫になっているよ、ラエル。一方向に気を取られすぎだ」

探していた目的の人物が、静かな笑みをたたえて、彼を見ている。

「相変わらず化け物並みですね、あんたは。普通剣を持った人間の背後には立たない。それこそ斬られたって文句は言えない」

「君が私を斬ることはない」

断定的な口調に、ラエルは舌打ちした。思わず悔しさがにじみ出た結果だ。

「私を探していたんだろう。だから、こうしてここに来た」

ラエルは諦めたように溜め息をついた。

「良からぬ算段があるなら、早めに教えておいてくれませんかね。じゃないと、うちのじゃじゃ馬が暴れ出すのを防ぐのが難しくなってくる」

ラエルの明らかな挑発にも、相手のにこやかな笑みは絶えない。

「私は君の直接的な物言いが好きだよ。なかなかできることじゃない」

「うわ、すっげえ馬鹿にされてる」

屈辱だ、と呻いてクーリエから視線を逸らし、頭を抱え込んだ。その行動に彼の笑ひはますます深くなつてゆく。

「アキと共に書齋へ来なさい。頼みたい事がある」

穏やかに告げる相手の真意を探り出すようにその顔を見るが、優しい微笑みをたたえた美貌があるばかりだった。

「それが、俺の質問への答え、ですか」

確認のために問い質すと、微かに頷いている。

ここにはいない相方を探してくると告げる前に、クーリエはついとラエルから視線をそらせて、少年の背後にそれを定めた。

「それとね、素直じゃなくても一生懸命な子も好きだよ。とても、かわいいと思う」

そう言つて、ぼかんと口を開けているラエルにもう一度微笑み、その場を立ち去つてゆく。

「どうしよう。思わず鳥肌がたったぞ、アキ」

ぞわりと粟立つた腕を抱え、ぶるりと身震いする。それぐらいの恐怖であつたらしい。

「僕もだよ、ラエル。なんだか、絶対零度の地に置かれたような寒

気がした」

ラエルの背後からゆっくりと姿を表した黒髪の少年は、いつも顔に浮かんでいる余裕のある笑みを消し、少し青ざめてすらいる。

「いつでも丸呑みしてやるぞという脅しなのか……」

「いっそ、そうであってほしい。あの発言が本心からだったら、この場所からすぐに消えたいぐらいだ」

あの変態が…、と呟きつつ舌打ちするアキに、いつもの柔和な少年の面影はない。ラエルは激昂している友人を横目で見て、顔をひきつらせた。

(すっげえ怒ってるよ。隠れてたのが見つかった事も影響してるな、こりゃ)

どうやらアキは、自分を囷にして探り出そうとしていたらしい。その行動に文句をつけたらラエルだったが、罰も受けたようなので、これ以上さわるのは止めておくことにした。

「で、聞こえてたんだろ。行くのか、書斎」

ラエルの気の抜けた声で発された質問に、アキは急に我に返ったように、普段の表情を取り戻し、にっこりと笑った。

「勿論だよ。いつまでも変態ジジイにやられっぱなしじゃ、この先あの子を守っていくことも出来なくなる」

そういって、ラエルを残し、書斎へと早足で消えてゆく。その背

中を見ながら、一番の負けず嫌いはアイツだなど、心の中で思い、
彼もその後を追ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802c/>

《クインティア・ウォー》－暴れ姫の序曲－

2010年10月15日22時04分発行